映像の有無が人物の特性推論に及ぼす影響

心理学科　18hp221　木下 開貴
（指導教員：長野 祐一郎）
キーワード：印象,映像,音声

序と目的

狩野ら(2020)は、ビデオ通話におけるコミュニケーションは必ずしもネガティブな評価を受けているわけではなく、日常生活におけるコミュニケーションと同等のものである可能性を指摘している。日常生活におけるコミュニケーションの方法として言語を用いたコミュニケーションと表情や視線などを用いた非言語的コミュニケーションの２つがある。橋本ら(2019)は、声の高さや速さ、抑揚、間の取り方などのパラ言語的特徴は音声に状態印象に影響を与えるとした。これは性格推論過程を方向付け、電話の会話のような、主に音声でのコミュニケーションを取る場面において日常的に生起すると述べている。このことから、表情や視線が確認できる映像付きのコミュニケーションと音声のみのコミュニケーションでは、聞き手が受ける印象が異なる可能性がある。また、音声のみのコミュニケーションは聞き手側の想像を掻き立て、好印象を得られる可能性がある。本研究では聞き手側が話し手側の映像の有無によって抱く印象に与える影響について検討する。

方法

実験参加者：30 名の大学生が参加した。平均年齢は 20.77 歳(SD=1.59)であった。

実験課題： 小説の朗読を行った動画を映像あり群と映像なし群でそれぞれ 4 回見せた。実験刺激動画は朗読者が男性 2、女性 2 の計 4 種類であり、1 つずつ質問紙を答える形式であった。朗読に用いた小説は兼松ユキによる「夜明け」という 405 文字のものを使用した。提示順序はカウンターバランスした。

心理指標： 音声状態印象は橋本ら(2019)で用いられたものを使用し、11 項目 7 件法で測定した。また、性格特性の推論も同様に橋本ら(2019)で用いられた BigFive 尺度から 20 項目を用い 5 件法で測定した。さらに、その声に対しての印象を、好きか嫌いか 2 件法の質問を作成し測定した。

手続き：実験参加者を映像あり群と映像なし群の 2 群に分け、実験に参加してもらった。はじめに実験参加者は練習シーンを視聴し、音量等の視聴する上で問題がないように調節した。練習シーンの視聴後、各自割り振られた提示順序で、動画を視聴し質問に回答した。

結果

音声状態印象はどの因子においても有意差は認められなかった(図 1)。しかし、好感度因子や力動性因子はわずかではあるものの映像なし群のほうが高い結果となった。推論された性格特性は協調性のみ有意傾向が認められ、映像あり群の平均得点が高かった(図 2)。その他の項目では映像なし群の平均得点が高かったものの有意差は認められなかった。

考察

本研究では、聞き手側が話し手側の映像の有無によって抱く印象に与える影響について検討した。その結果、協調性のみ有意傾向が認められ映像あり群の得点が高かった。これは話し手の表情が見られることによる安心感から高くなったのではないかと考えられる。そのため、授業やミーティングなどの他者と協力して作業する場面においては映像がある状況が好ましい可能性がある。

今後は朗読だけでなく、スピーチや会話、授業などを用いて測定することで、映像の重要性について深く考える必要があるだろう。

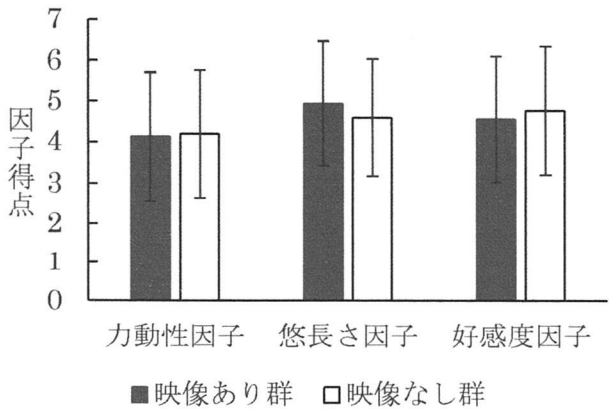

図 1 群ごとの音声状態印象得点

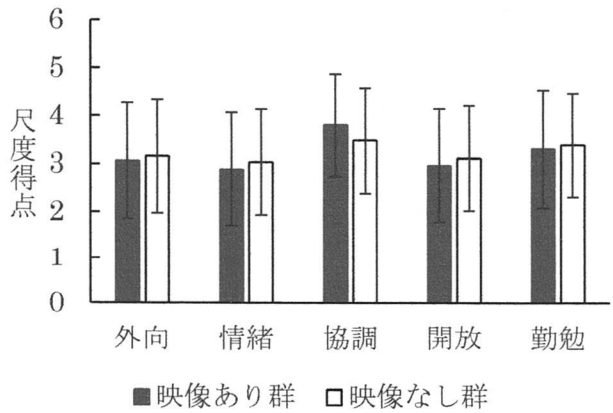

図 2 群ごとの各人格特性推論得点

映像の有無が人物の特性推論に及ぼす影響

学籍番号：18hp221
氏名：木下 開貴
指導教員：長野 祐一郎

序と目的

［コミュニケーションの現状］

現状コロナ禍において、テレワークやオンライン授業などが徐々に普及しつつある。制度等に基づく雇用型テレワーカーの割合は2020年4月13日時点で27%まで上昇している(厚生労働省,2020)。このことからも、以前に比べオンラインコミュニケーションは一般化しつつあり、その心理学的な特徴を捉えることは重要な課題である。狩野ら(2020)は、ビデオ通話におけるコミュニケーションは必ずしもネガティブな評価を受けているわけではなく、日常生活におけるコミュニケーションと同等のものである可能性を指摘している。しかし、オンラインコミュニケーションならではの特徴も存在するはずであり、それらを明らかにしていく事が今後必要になってくる。特に、言語だけという限られた情報から、相手の印象形成や特性推論を行う過程は、より頻繁に生じることとなっているはずである。このようなことからも、話し手の表情が見られるビデオ通話と音声のみの電話の違いを明確にすることの意義があると考えられる。

［コミュニケーションの方法と評価］

日常でコミュニケーションを取る際、私達は主に2つの方法を用いている。ひとつは、言語を用いるコミュニケーションであり、もう一つは言語ではなく、視線や表情などを用いた非言語的コミュニケーションである(中村,2004)。また橋本・古谷(2019)は、声の高さ、速さ、抑揚、間の取り方などのパラ言語的特徴は音声状態印象に影響を与え、性格推論過程を方向付けており、このような現象は電話の会話のような、主に音声でコミュニケーションを取る場面において日常的に生起していると述べている。これらのことから直接顔を見るコミュニケーションと音声のみのコミュニケーションでは、聞き手が受ける印象が異なる可能性がある。さらに橋本・古谷(2019)は、パラ言語的特徴を手掛かりとした性格特性の推論過程では、(信頼性や魅力度といった) 特定の性格特性の推論が促進されると述べている。このことから、本研究においても音声状態印象を測定することで映像の有無が印象に与える影響をより詳細に調べることが出来ると考える。そのため、本研究では音声状態印象も質問項目に加える。なお、音声状態印象を測定する質問項目は橋本・古谷(2019)で用いられた3因子の質問項目を使用して検討する。

［人格の推論］

人格を推論する方法には様々なものがあるが、ここでは、性格特性論として一般的なBig Fiveを用いた手法を採用する。パーソナリティを構成するいくつかの変数(共通特性)の程度を量的に測定し、それらの組み合わせでパーソナリティを説明しようとするのが特性論の立場である(和田,1996)。パーソナリティを考える上で、多くの論文で使われているBig Fiveを用いて相手の印象を測定することで、映像の有無が印象に与える影響が現れる可能性があるため、本研究では橋本・古谷(2019)に倣い、Big Five性格特性を測定する。

［仮説］

これらのことから本研究では、聞き手側が話し手側の映像の有無によって抱く印象に与える影響について検討する。映像がない場合、相手の表情やしぐさなどの非言語的コミュニケーションが分からないため、聞き手側の経験による予測や希望的観測により全体として好印象を抱くのではないかと仮説を立てた。ただし、映像がある場合、表情が見られることで、協調性は高くなるという仮説を立てた。

方法

実験参加者

30 名の大学生が参加した。平均年齢は 20.77 歳(SD=1.59) であった。実験参加者を 2 群に分け、映像あり群と映像なし群とした。

実験課題

小説の朗読を行った動画をそれぞれの群で 4 回視聴させた。実験刺激にあたる動画は、朗読者が男性のものを 2 種類と、同じく女性のものを 2 種類、計 4 種類であり、1 つずつ質問紙に答えるものであった。小説は兼松ユキによる「夜明け」という 405 字のものを使用した。また、動画の提示順によって数値に偏りが出ないようにするため、提示順序を変更しカウンターバランスした。

実験環境

本研究では、オンライン上で行った。なおその際、提示方法は参加者に任せた。測定に先立ち、練習シーンを表示し適切な音量に調節し視聴するように教示した。

手続き

実験参加者を映像あり群と映像なし群の 2 群に分け、実験に参加してもらった。はじめに実験参加者は練習シーンを視聴し、音量等の視聴する上で問題がないように調節した。なお、練習シーンは「これは練習シーンです。こちらの動画を見て音量調節をお願いします。指示に従って質問紙の回答をお願いします。」と教示する動画であった。練習シーンの視聴後、各自割り振られた提示順序で、動画を視聴し質問に回答した。

指標

音声状態印象は SD 尺度を用い、11 項目 7 件法で測定した。質問項目の内容は高橋ら(2019)で用いられたものを使用した。「声が大きい-声が小さい」などの音声の物理的特徴を測定するものや、「おどおどしている-自信がある」などのパラ言語的特徴を測定できる項目も含まれていた。音声状態印象を測定した質問項目を表 1 に示した。

橋本・古谷(2019)の研究に準じ、性格特性を Big Five 尺度から 20 項目を用いて、5 件法で測定した。なお、質問紙の信頼性を保つため、逆転項目も用意した。性格特性を測定した項目を表 2 に示した。

さらに、その声に対しての印象を、好きか嫌いか 2 件法の質問を作成し測定した。

表1 音声状態印象を測定した項目

力動性因子	1	幼い	―	大人びた
	3	おどおどしている	―	自信がある
	4	弱々しい	―	力強い
	6	声が大きい	―	声が小さい
	8	声が高い	―	声が低い
悠長さ因子	2	せっかちな	―	ゆったりとしている
	5	ぞんざいな	―	丁寧な
	7	早口な	―	ゆっくり話す
好感度因子	9	好感が持てない	―	好感が持てる
	10	親しみにくい	―	親しみやすい
	11	信頼できない	―	信頼できる

表2 性格特性を測定した項目

外向性	1 話好きな	R 3 無口な
	2 外向的	4 積極的な
情緒不安定性	5 悩みがち	7 傷つきやすい
	6 心配性	8 神経質な
協調性	R 9 短気な	11 親切な
	R10 怒りっぽい	12 素直な
経験への開放性	13 頭の回転が速い	15 好奇心が強い
	14 興味が広い	16 呑み込みが早い
勤勉性	R17 いいかげんな	19 勤勉な
	18 几帳面な	R20 飽きっぽい

Rは逆転項目を示す。

結果

まず、音声状態印象について群ごとに平均値と標準偏差を算出した。さらに、縦軸を尺度得点、横軸を各因子(力動性因子、悠長さ因子、好感度因子)としてグラフを作成した(図1)。なお、エラーバーは標準偏差を示した。

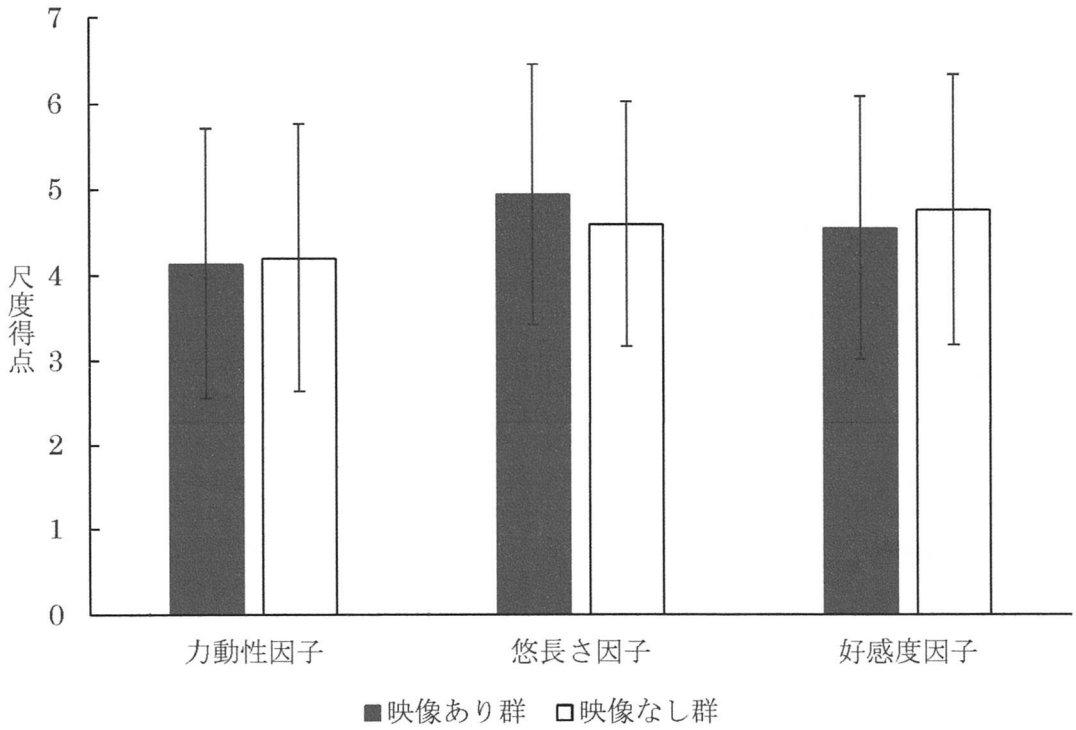

図 1 群ごとの各因子による尺度得点

図 1 を見ると、力動性因子は映像の有無に関係なく同程度の尺度得点であった。悠長さ因子は映像あり群のほうが高く評価され、好感度因子は映像なし群が高く評価された。どの因子においても、ばらつきに大きな差はなく 1.5 程度で存在していた。

実験の結果から、映像の有無によって各因子が尺度得点に与える影響に有意差があるかどうかを調べるため、条件間の t 検定を行った。どの因子においても有意差は認められなかった(力動性因子:$t(26)=0.46$, *n.s.*; 悠長さ因子:$t(27)=1.33$, *n.s.*; 好感度因子 $t(21)=0.59$, *n.s.*;)。

次に、特性推論(外向性、情緒不安定性、協調性、経験への開放性、勤勉性)について群ごとに Big Five の平均値と標準偏差を算出した。さらに、縦軸を尺度得点、横軸を特性推論としてグラフを作成した(図 2)。なお、エラーバーは標準偏差を示した。

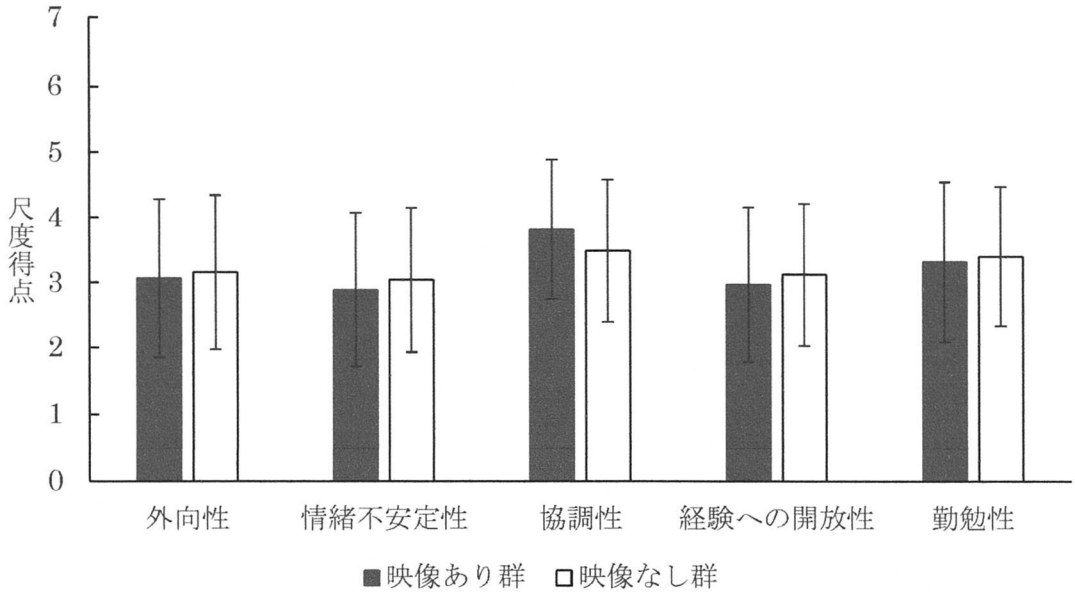

図 2 群ごとの各人格特性推論得点

図 2 を見ると、協調性のみ映像あり群が高くなり、外向性、情緒不安定性、経験への開放性、勤勉性は映像なし群が高くなった。ばらつきは、どの特性でも 1 程度であった。映像なし群はどの特性においても、3 以上の尺度得点を獲得していた。

実験の結果から、映像の有無によって特性推論に影響があるかを調べるため、条件間の t 検定を行った。協調性では有意傾向が認められた($t(26)=1.94, p<.10$)。しかし、他の特性推論からは有意差は認められなかった(外向性:$t(27)=0.50$, *n.s.*; 情緒不安定性:$t(26)=0.81$, *n.s.*; 経験への開放性:$t(27)=0.12$, *n.s.*; 勤勉性:$t(24)=0.43$, *n.s.*;)。

考察

本研究の目的、聞き手側が話し手側の映像の有無によって抱く印象に与える影響について検討するものであった。

本研究では、視聴する動画を映像あり群と映像なし群の 2 群に分け、その動画によってどのような印象を抱いたかを質問紙で行い、平均値と標準偏差を算出した。その後、群によってどのように異なるかを比較した。

図 1 の結果から、有意差は見られなかったものの、映像あり群は悠長さ因子が高くなる傾向があった。悠長さ因子には話す速度や丁寧さが含まれていることから、聞き手が話し手の話す内容をしっかり聞き、理解するために必要な何かが影響を及ぼしている可能性がある。例えば、黙声認識が影響を与えているのではないかと考えられる。黙声認識とは、口の動きを読み取る読唇を行うものである。聴覚刺激のみの場合と視覚刺激と聴覚刺激の

2つを用いた場合を比較すると、視覚刺激と聴覚刺激のどちらも用いた場合、より丁寧に、よりゆっくり聞こえるのではないかと考えられる。好感度因子も有意差は認められなかったものの映像なし群が映像あり群と比較して、わずかに高くなる傾向があった。中村(2021)は、顔から印象を即時的にかつ自発的に知覚する傾向は人という種に普遍的に備わった性質であると述べている。このことから、映像あり群と映像なし群では、相手に抱く印象にずれが生じ、希望的観測から映像なし群の好感度因子がわずかに高くなったのではないかと考えられる。

図2の結果から、映像あり群は協調性が高い傾向が認められた。話し手の表情が見られることによる安心感から協調性が高くなったのではないかと考えられる。また、好感度因子と協調性は一見すると類似した質問項目であったが、協調性に差が生じ、好感度因子では差が生じなかった原因として、好感度因子の回答が人物そのものではなく文章を対象としていた可能性があるのではないかと考えられる。

わずかな差ではあるが、協調性を除く性格特性は映像なし群が高くなった。外見から受ける印象はプラスに働く傾向が少ないのではないかと考えられる。そのため、参加者の人数を増やすことで有意差や有意傾向が認められるのではないかと考えられる。音声のみの評価は、相手の容姿を良い方向に想起させ、評価が上がったのではないかと考えられる。

以上のことから、本研究では想定されていた結果とわずかに異なる結果となった。しかし、全体的に見ても映像なし群の尺度得点は全体的に高く、映像あり群と比較しても映像なし群が協調性を除いて高い結果となったことから、相手に抱く印象は映像がない場合に高くなる傾向があると考えられる。相手の容姿を音声から判断する際に、経験からの予測だけでなく希望的観測が含まれているからではないかと考えられる。唯一、協調性のみが映像あり群が高くなった原因として、「親切さ」や「素直さ」は外見から読み取る場合高く評価されるのではないかと考えられる。今後、同様の実験を行う場合は刺激となる文章を変更した場合や人物を変更した場合が、同様の結果となるかを考慮する必要があると考えられる。また、サンプル数を増やすことで具体的にどの性格特性や音声状態印象が映像の有無で異なる評価を受けるのか明確になるのではないかと考えられる。

引用文献

橋本和奈実・古谷健(2019). 発話速度と声の高さが特性推論に及ぼす影響-二段階推論仮説に基づいて- 応用心理学研究 *45*, 15-25.

狩野繭姫・布井雅人(2020). 直接対面とビデオ通話における日常的コミュニケーションの評価の違い-LINE のビデオ通話機能を用いた検討- 聖泉論叢 *28*, 105-116.

厚生労働省(2020). https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_11109.html .

中村克樹(2004). 非言語的コミュニケーションの意義 学術の動向 *9*, 28-31.

中村航洋(2021). 心理学における顔印象研究の動向と展望 エモーション・スタディーズ

6, 20-27.
和田さゆり(1996). 性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成 心理学研究 *67*, 61-67.

資料

詩題：夜明け
作者：兼松ユキ

風が吹いている。
私の身体を押し戻そうと必死になって。
それでも前へ前へと歩みを進める。
そんな私の頬を風は冷たく撫でた。
分からないほど辛くなって、何が辛いのかも解らなくなった。
堪えた涙も頬を伝ってはじめて気が付く。
躓き、よろめき、また転げる。
それでも傷まみれの身体は動く。
少しずつ、ゆっくりと。
腕を伸ばしたその先で、掴めたものは朝日でした。
やがて光は溢れだし、すべてを明るく照らし出す。
暖かく、柔らかな陽射しで。
人々が目覚め、私に気が付く。
貴方はこちらへ駆け寄って手を差し伸べてくれた。
私の脚が前に進むためのものならば、この手は一体何のためにあるのだろう。
初めて抱いた疑問を前に、私の視線は地面に向かう。
少しの時間が過ぎた後、貴方は微笑みながら語りかけてくれた。
その一言一言に私は救われた気がする。
今、私は泣いているのでしょうか？
それとも笑えているのでしょうか？
穏やかな風が吹いてきた。
それは、何かを届けるように。